

超短編読み切り小説

わたしが、スノーボードをやめたわけ。

作/TOKO
 案/石原繁
 挿し絵/樋口篤郎

国境の、ながいトンネルを抜けるとそこは雪国だった。日帰りは無理だった。トンネルの向こうに宿をとるしかなかった。某温泉町観光協会に電話したときから、わるい予感ではしていたのだ。某有名スキー場近くの宿をさがしているんですが、と、わたしは訊いたのだった。

「はい、日時と宿泊される人数、ご予算は」と、応えてくれるはずだった。それが観光協会の仕事であり利益であるはずだから。いつかの?、と電話のむこうから、初老の男が土地の言葉で尋ねる。わたしはほっとする。

この男は、かれの仕事をまっとうしてくれそうだ。

わたしは、じぶんで言うのも変だが、きっちりとしているほうだ。

老人には席を譲り、税金の滞納もなく、駐車違反のタグをつけられればその足で署に出頭する。もちろん仕事だって——コンピューターシステムのメンテナンス会社に勤めているのだが——クライアントが支払う料金以上のサービスを提供しているつもりだ。

だからってわけじゃないが、わたしは他の社会人にも、同じことを要求する。べつに難しいことじゃない。当然のことだ。

——しかしだ、たとえば、わたしは独身で外食が多いのだが、ちゃんとしたご飯が出てくる食堂のほうが珍しい。食堂は、飯を炊くプロであるはずなのに、たいていは飯がべっちょりしている。そういう店は味噌汁もひどい。ダシが利いてないことはもちろん、たいていは薄すぎて、具がしおれている。なにも完璧な飯を出せといっているのではない。ふつうにマジメな主婦が、ふつうに炊いた程度の飯と味噌汁でいいのだ。

ひどい飯を出すからといって、とくに料金が安いわけではない。そんな店、さびれてもいいと思うのだが、少なからず客がいて、文句も言わずさき込み、代金を払うとき「ごちそうさま」と言いさす……。——余談が過ぎた。話を戻そう。

いつかの?、と電話のむこうから、初老の男が土地の言葉で尋ねたのだった。何人かの?、

「2月10日、一泊で8人です」。わたしは、大学のテニスサークル同窓会の幹事を任されたのだ。

スキーヤーもいればスノーボーダーもいる。どうせなら雪山で、ということになった。難しいことはわかっていて。

翌2月11日は建国記念日で、8人。マイナーなエリアのマイナーなスキー場にすれば良かっただろうが、女の子にウケないと思った。大学の時、ずっと片想いしていた、いまは派遣社員として食品メーカーで働いているケイコも参加するのだ。

「あー……」親父が苦しそうな声をあげる。「イシハラ旅館さんなら空いてるんじゃないかねえべか」

自信なさそうな返答、当然、続けて料金と土地を教えてくれるべきだが、返事がないので仕方なく尋ねる。

「〇〇スキー場さんからは、遠くはねえべよ」遠くはないとはどの程度か、歩いていけるくらいか、無理なら送迎してくれるのか?、

宿はベースの町にあるのか、スキー場の中腹か、風呂はいいか、飯はうまいか? いちいち確認する。

歩いていけねえこともねえべよ、

風呂は悪かねえと思うよ、飯も、まあいいんでねえの、何を訊いても答えがはっきりしない。知らないから(観光協会の担当者が知らないで済むわけがないのだが)というよりは、「奥歯にモノが挟まった」ようになって言うのだけ、はっきり答えて、イシハラ旅館さんに恨まれたくねえもんでみたいな、不誠実なかんじがする。仕方ない、教えてもらった電話番号にかけて確認する、と、あっさり断られた。

「すみませんねえ、10日はもう一杯なんですよ」この時期になって、休日前に8人の予約だった? 呆れたような響きが、その声には交じていた。

仕方ない、また観光協会に電話する。同じことを3回繰り返し、ペンション・シーゲルでやっと予約ができた。

一泊2食つきで税別9500円、「ディナーはフランス料理」だという。少々予算オーバーだが仕方ない。じゃあ10日、よろしくお願ひしますね、と電話を切ろうとすると、

「チェックインは4時ですから。夕飯は8時までにご食べと、皆さんにお伝えくださいねえ」と、クギをさすように、念を押された。

2月10日。6時半に待ち合わせたのだが、遅刻する者もいて、クルマ2台に分乗して渋谷とすでに3時だった。

ペンション・シーゲルのディナーは8時までで、せっかくのフランス料理は風呂に入ってから戴きたいから、6時半には宿に入らないといけないので、3時間弱しか滑ることができないのに、3500円の午後券を買うしかない。

回数券では足りないような気がするし、ゴンドラに乗れない。東北のどこかのスキー場であると聞けれど、「時間帯」がもっと普及すればいいのに。

皆は渋滞で疲れているのに、幹事のわたしに気をつけてはしゃいでくれるみんなに、わたしは気を使って疲れてしまう。

スノーボードは金がかかる。板やブーツや服に金がかかるのは仕方ない。安くはないが、最近は供給過剰気味で、無理を言わなければいい買い物もできる。

問題は、選択の余地がないランニングコストだ。たとえば今朝の渋滞で2時間を無駄にした首都高、東京オリンピックに間に合わせるため急いでつくり、あちこちに綻びがある(箱崎には信号さえある)この道路は、30年後には償却して通行料を無料にする公約だった。なのにいまだに値上げを続けている。

K越自動車道も似たようなものだ。

世界のどこに、インフラの基本である道路の通行料金だと、数千円も数万円も徴る国がある? けれど日本人は、値上げにもさして文句を言わず、黙って渋滞に耐えている。それは仕方がない。

ほんとは仕方がくはないのだが、相手が日本国政府なので、短期的にはさしあたって我慢するしかないのだ。

しかし、スキー場と宿は、こちらに選択の自由があるはずなのだ……。

ゴンドラの列にならび、やっと乗れた時には4時を過ぎており、グレンデモリフトも混んでいてほとんど滑れなかった。

ベースから、ペンション・シーゲルへの道を、スキーを担ぎ、スノーボードを抱え、皆なで歩いた。

同窓会の始まりはひどかったが、誰もが高揚していた。大学時代のように、これから皆でいっしょに一夜を過ごすことが楽しみで。

ペンション・シーゲルは、名こそペンションだが単なる民宿だった。玄関の脇にある乾燥室の戸の建て付けが悪く、やっと開けたが暖房が入っていなかった。

「某スキーサークル同窓会の皆さんね」と、ペンションのママというよりは農家の小母さんみみたいな女将を迎えられる。

「ご飯は6時半から8時までにご食べと、くださいねえ」

「お風呂は9時までが女性で、男性はそのあとから入れますからねえ」

アスペンとかシャーモニーとか、部屋の名前がついているのに、小母さんは、階段降りて突き当たりを左の部屋ですよお、と言った、「階段降りて突き当たりを左の部屋」には怒がなかった。屋根裏部屋のように傾斜した天井にちいさな明かり取りの窓があるだけだ。

10畳くらいで妙に細長く、部屋にはすでに布団が8組、並列に敷かれてあった。長辺方向の壁一面が押入れになっており、開けると、不自然に奥行きがあった。

ポットと急須が載ったテーブルが隅に押しやられ、おのおののバッグを降ろすと文字通り足の踏み場がなくなった。

女性も3人交じていたのに、部屋はそのひとつだった。

すでに布団が敷かれた布団部屋で雑魚寝せよ、と要求されていることに間違いはなかった。

晩飯の前にすでに布団が敷かれているのは、隣のおばさんの勤務時間の都合らしかった。男女8人、布団のうえに座るわけにもゆかず、やや突然と立ちつくしていると、薄い壁を通して、痰を切る親父の声と水洗トイレの水音が聞こえ、派遣社員として食品メーカーで働いているケイコが、落胆したことを隠さないようにうつむいた。



「お食事の用意ができましたので、食堂にお集まりください」廊下のスピーカーは雑音が多く、音声割れて聞こえる。——本日のメニュー。

「クリケット・ホワイトソース添え、若鶏のプロバンス風」手書きでそう書かれた、小さなホワイトボードが載ったテーブルは、叩くとそのボードが跳ねそうに天版が薄く、脚の1本が浮いてガタつき、床はタイル柄のビニールで、同じくビニール製のスリッパは裸足で穿くとベタついて気持ち悪かった。

テーブルの間を8つくらいの男の子がうるさく走り回り、小母さんが口汚く叱って追いかけ戻を叫んだ。

厨房と食堂の間の壁には配膳のため小窓が穿たれ、表面が波打ったステンレスのカウンターのうえにひと抱えもあるジャーが置かれ、その隣の水を張ったボウルに飯をすくう杓子がつっこまれていた。

胡椒、アジシオ、七味、醤油、ソース。丸い、プラスチックのワゴンに調味料が載っている。スーパーで売っている小瓶そのまま置かれている。ソース瓶の液面上の内側に乾いたソースがこびりついている。

皆な、表情や、喋ることが、不自然だった。ペンション・シーゲルへの失望というよりは、幹事であるわたしに気をつけて苦しんでいるのだ。けれど、——いちばん苦しかったのは誰よりも、このわたしだった。

大学を卒業してからの、それが初めての同窓

会だった。社会のきびしさや冷たさをそれなりに体験し、皆なこの旅をどれほど楽しみにしてきたことが。プラスチック製の黄ばんだ定食盆で「本日のメニュー」が運ばれてきた。

「クリケット・ホワイトソース添え」はただのコロッケにマヨネーズがかかっているだけだった(正確には、スーパーで売っているタルタルソースみみたいな……)。

「若鶏のプロバンス風」は塩胡椒してロースただけで、プロバンス風(ってなんだよ)というよりは「解凍鶏モモの照り焼き風」。

あとはコーンポタージュ(このメニューなら普通は透明なスープだろう)、しおれたレタスのうえにべちょべちょのマカロニサラダ。平皿にごてつとした飯が盛られ、福神漬とラッキョが添えられて妙だと思ったら、テーブルの中央にカレーが入った土鍋が置かれた。明らかに、スーパーや、仕出し屋から買い叩いてきた食材を暖めなおしたもので、厨房の仕事は、缶詰のコーンポタージュを暖める、マカロニを茹でてマヨネーズを和える程度に過ぎなかった。

うまいわけがなかった。ひどく空腹だったので、男たちはそれでも、カレーでお代わりするため、水を張ったボウルに突っ込まれた杓子をとって、ごてつとした飯を盛るのだった。

空腹は最高のシェフだというが、嘘だ。まずいものは、空腹でもまずい。まずいものでも、食わないことには、空腹が収まらない、ということに過ぎないのだ。

「本日のメニュー」を、のみくだしながら、私は腹が立って仕方がなかった。仕事には、金儲けという側面と同程度に、やりがいと言うか、物をつくる仕事であれ、サービスを提供する仕事であれ、相手に喜んでもらうヨロコビ、があるはずだ。

ペンション・シーゲルにも、いろいろ事情があるのだろう、しかし、儲かるときに儲けよう、ほったくろうという意識しかみえない。なのに食堂は満席だ。わたしたちを布団部屋に押し込んだということは、他の部屋は埋まっているのだろう。

おかわりの飯を盛りながら眺めると、みなそれなりに楽しそうにしている。

? なんだよお前ら、これで9500円税別で文句ねえのかよ? 星一徹みたいに、テーブルをひっくり返したくなんねえのかよ?、ロビーにあった「おもいでの一と」を壊してみたのだが、「マスターのおはなしがステキでした。また聞かせてね。♡リ工」みみたいな書き込みがけっこうあって、リピーターも案外いるのかも知れない。

ひょっとしたらマスターだって、ほったくってるなんて意識はなく、うちのお客さんは喜んで帰ると、ペンション・シーゲルを営むことに、自己実現的な歓びを感じているのかもかも知れない。

なぜこんなに腹が立つのかが分かった。おれ自身に腹が立つのだ。

ちゃんと調べせす予約して、布団部屋の雑魚寝にも苦情を言わず、おれだって、この、べちゃっとしたクソみてえな飯を盛ってるじゃないか。

わたしは席にもどり、わたしに気を使ってくれる皆なに気を使うのにも疲れ、無言でまずいカレーを乱暴にかき込んだ。

楽しもうと思って、いろいろと計画を立てて、お金を集めたのに、なんでこんな思いをしなくちゃなんねえんだ。

——「ごちそうさま」小さな声に顔をあげた。

派遣社員として食品メーカーで働いているケイコが食膳を戻しながらそう言ったのだった。「あいよっ!」と、不潔な茶髪に頭巾もしていない、厨房の若いバイト君が受け取った瞬間、わたしは小さくない声で吐き捨てていた。

「こんなクソ飯にごちそうさまなんていうことねえよ!」

食堂にいた全員が凍りつき、派遣社員として食品メーカーで働いているケイコはしくしくと泣き出してしまった。

……。

出発前には、毎年の恒例にしようとして盛り上がった同窓会は、あれ以来、行われていない。(少なくとも、わたしには連絡がない)

あれ以来、わたしは、あれほど夢中だったスノーボードも、やめてしまった。

つまらない理由で、スノーボードを止めるな。

解説

●小説というには、プロットが甘く、主人公のキャラクターも漠然として、締め切りで追われた作者が、3時間くらいで書き飛ばしたということが行間から読みとれる。

しかし、解説者は、スノースタイル誌のこのページで、あえて小説という体裁をとったことは理解できるのだ。この小文を目にしたどこかの観光協会がクレームの電話をしってくることを予想し、伏線を張ったのだろう(つまり、小説とは本来フィクションだから)

物語はやや極端だが、ハイシーズンに、メジャーなスキーエリアで宿をとったスノーボーダーなら誰でも多少は頷ける内容となっている。——言わずもがなだが、作者は「ペンション・シーゲル」が象徴する、アコモデーション一般を攻撃しているのではない。

問題は「ペンション・シーゲル」ではなく、選択できないこと、翻って言えば、「努力して選択しよう」ということなのだ。

「ペンション・シーゲル」が物語の内容で9500円なら論外だ。が、布団部屋でも素泊まり2500円というオプションがあれば、それはそれで納得できるのだ。

問題は、オプションが少ないこと。だから「頑張って」選ぶ必要があるということ。そして、お金を払うのだから、きちんと評価すべきだということ。

満足できなかった宿やスキー場には2度と行くなということ。そういう批評精神こそが、サービスを向上させる。

解説者は、作者の、読者に対する暖かい問いかけを感じるのだ。

「せっかく始めたスノーボードなんだから、つまらないことで止めるなよ」

スノーボードは金が掛かる。板、ブーツ、服、リフト券。

高連道路代を節約しようとして一般道を行くといよいよ日帰りは難しくなる。

たとえばサーフィンでは、外房など、素泊まり2500円の安宿や700円で腹一杯という飯屋を捜すのはそう難しくはないのだけれど……。

スノーボードにおいては、宿代がいちばん納得できない「痛い」出費となり、この物語の幹事氏のような経験を2度3度と繰り返し、スノーボードを止めてしまうことが多いのだ。

読者諸君、しっかり選択しよう。つまらない理由で、スノーボードを止めるな。